

改訂版デートバイオレンス・ハラスメント尺度の作成と分析(1)被害に焦点を当てた分析

NAGANUMA, Satomi / 越智, 啓太 / 喜入, 暁 / 甲斐, 恵利奈
/ 佐山, 七生 / 長沼, 里美 / OCHI, Keita / KIIRE, Satoru
/ KAI, Erina / SAYAMA, Nanao

(出版者 / Publisher)

法政大学文学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of the Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要

(巻 / Volume)

71

(開始ページ / Start Page)

135

(終了ページ / End Page)

147

(発行年 / Year)

2015-09-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00012283>

改訂版デートバイオレンス・ ハラスメント尺度の作成と分析 (1)

— 被害に焦点を当てた分析 —

越智 啓太・喜入 暁
甲斐恵利奈・佐山 七生
長沼 里美

要 旨

本研究では、デートバイオレンス・ハラスメントの被害の程度を測定するための尺度を作成した。この尺度は、身体的暴力、間接的暴力、支配・監視、言語的暴力、性的暴力、経済的暴力、つきまとい・ストーキングの7つの下位尺度から構成される。次にこれらの尺度と被害者、加害者の属性について分析を行った。その結果、男性のほうが女性よりも被害を受けることが多いこと、関係が進展するにしたがって被害が減少することなどが示された。

1. 問 題

夫婦間や内縁のカップル間で行われる暴力行為は、ドメスティックバイオレンス (domestic violence) と呼ばれ、近年、多くの研究が行われるようになってきた。これに対して、デートバイオレンス (dating violence) と呼ばれる婚姻関係にない交際期間中のカップル間で行われる暴力行為については、わかっていないことも多い。ドメスティックバイオレンスは、家庭という他人の目に触れない場所で発生するため、その実態がわかりにくいという特性があるが、デートバイオレンスでは、そのような特性に加え、第三者から見れば、「別れたければいつでも別れられるのに」と思われやすいこと、実際に行われる行為が、殴る蹴るなどの身体的暴力など文字通りの「バイオレンス」行為であるよりも、髪型の強制や交際関係の制限、携帯電話による監視などの「ハラスメ

ント」行為が主体であり、第三者からは「見えにくい」行為であること、被害者がそもそもデートバイオレンスの被害者であるということを実感しにくいことや、それゆえ、被害者が相談機関などに来所してこないこと、などから、さらに実態の把握が困難となっている。そのため、その発生を規定する要因や対処方法について明らかになっていない。

そこで我々は一連の研究において、デートバイオレンスの現状を把握するとともにその特性やその発生を規定する要因について明らかにすることを試みている。第1報 (越智・長沼, 甲斐, 2014) においては、男性と交際中の女子大学生・大学院生 600 名を対象として、デートバイオレンスをいくつかの下位項目 (直接的暴力, 間接的暴力, 言語的暴力, 監視・支配, 経済的暴力, つきまとい) に分類し、それらの被害の程度を測定する尺度を作成し、加害者の行動特性との関連について明らかにした。第2報 (越智・喜入・甲斐・長沼,

2015)においては、加害者の性格特性とデートバイオレンス被害の関連について検討し、社会的剝奪感や自己愛傾向などの尊大さといった特徴がすべての種類のデートバイオレンス・ハラスメント行為と関連していることを明らかにした。

ただし、これらの調査にはいくつかの不十分な点も存在した。それは以下のような点である。

- (1) 対象にしたのが、大学生・大学院生のみである。大学生・大学院生はどちらかといえば、社会的にも経済的にも恵まれたポジションにいる場合が多い。また、将来比較的高い社会的ポジションにつく可能性も高い。このような対象者は暴力行為の加害者になることも被害者になることも低いことが想定される。そのため、実際に発生しているデートバイオレンス、デートハラスメントの程度を低く見積もってしまう可能性がある。また、デートバイオレンスの程度や質も他の集団と異なっている可能性がある。
- (2) 調査対象にしたのがすべて女性である。確かにドメスティックバイオレンスやデートバイオレンスの被害者となるのは、女性のほうが男性よりも多い可能性はあると思われるが、近年では男性が女性の交際相手から被害を受けているというケースも数多く報告されている。また、男性と女性の被害者率の差も明らかになっていないのも現実である。デートバイオレンスの実態を明らかにするためには男性のデータも収集し、比較することが不可欠である。
- (3) 加害対象として、「いままで交際したことのある男性」について回答させた。その結果として中学校における男女交際を念頭に置いて回答を行った対象者もいた。中学生カップルにおけるデートバイオレンスもちろん発生する可能性があるが、やはり若年なのでその特徴も大学生や成人のものと異なっている可能性もある。また、現在の交際相手についての評定と過去の交際相手についての記憶に基づく評定は異なっている可能性もある。そ

のため、デートバイオレンスについてその実態を明らかにするためには、少なくとも18歳以上の対象者の現在の交際相手に限って分析を行っていくべきである。

- (4) 調査内容に性的な虐待やハラスメントを含めていなかった。しかし、デートバイオレンスやハラスメントにおいても性的な虐待は比較的発生頻度が高く、問題としても比較的大きなものだと思われる。そのため、性的な行動についても含めて議論していくことは欠かすことができない。
- (5) 尺度の項目数が下位尺度ごとにバラバラだった。越智ら(2014)では、バイオレンス・ハラスメント行為だと思われる行動を73種をあらかじめあげ、その結果を分析、分類して尺度を構成した。そのため、虐待の種類によっては構成された尺度の項目が非常に多くなったり、少なくなったりしてしまった。たとえば、経済的虐待を測定するための項目はわずか3項目から構成されているものであった。これでは虐待の種類によって測定精度などが異なってしまう、虐待間の関係などを明らかにしにくい。そのため、すべての虐待の種類についてできるだけ同数の項目からなる尺度を作成することが必要である。

そこで、今回の研究においては、調査対象者を交際相手がいる18歳から39歳までの男女に広げ、質問項目についても改良を加えた上で調査を実施することにした。

2. 方 法

調査参加者：あらかじめ調査会社のデータベースに登録されている調査協力候補者の中から、現在異性と交際している（同性愛のケースは今回は、対象としていない）、全国の18歳～39歳までの未婚の男女600名（男性300名、女性300名）を調査対象としてウェブ調査を行った。交際の定義としては、「つきあっている（交際している）」とは、一回以上ふたりきりでデートをしたことがあ

るということで、告白や正式な交際宣言などをしたりしている必要はない。他の人と平行して交際しているか否かは問わない」とした。調査対象者の、平均年齢は、28.79 歳（標準偏差 5.79）、男性は、28.78 歳（標準偏差 5.70）、女性は、28.79 歳（標準偏差 5.86）であった。複数の異性と交際している人はそのうちの任意の 1 名との関係について回答した。回答がぶれないようにはじめに対象者のイニシャルを識別子として記載させてから、回答をおこなせた。なお、調査は㈱クロス・マーケティングに委託して行った。回答はおおむね 5～15 分程度で行われる。日本全国のすべての県に 1 名以上の参加者がいるように対象者を選定した。参加者はこの調査に回答することでのちに商品などと交換することが出来る一定のポイントを得ることが出来た。

実施した質問紙の内容：調査対象者には、自分自身と交際相手の年齢、職業、学歴、住所（県）、魅力度の評定、喫煙、飲酒の有無とその頻度などの質問と、恋愛の進展状況、相手と別れた場合の次の交際相手を見つけるまでの推定期間などの質問に回答させた。また、改訂版のデートバイオレンス・ハラスメント尺度と恋愛に関するいくつかの尺度を実施した。

改訂版のデートバイオレンス・ハラスメント尺度は、越智ら（2014）で作成されたデートバイオレンス・ハラスメント尺度の項目に性的なハラスメントの項目を付け加え、さらに経済的ハラスメントなどの尺度に項目を加えた 60 項目の尺度。この尺度は交際相手からの被害の程度を測定するものである。具体的には、「あなたは交際相手から、以下のことをされたことがありますか」などの質問について「まったくない（1）」、「ほとんではない（2）」、「たまにある（3）」、「ときどきある（4）」、「よくある（5）」の 5 段階で評定させるもので、項目としては、「机や壁を殴る、蹴るなどして相手から脅かされたことがある」や「裸や見られたくない写真を撮ろうとすることがある」などがある。

3. 結果と考察

3-1. 改訂版デートバイオレンス・ハラスメント測定尺度の作成

デートバイオレンス・ハラスメント尺度について、先行研究に基づいて各下位因子（身体的暴力、間接的暴力、支配・監視、言語的暴力、経済的暴力、つきまとい・ストーキング）に属する項目、および今回新たに加えた性的暴力の項目について因子分析を行った。それぞれの因子ごとに因子分析を行い、因子負荷量の高いものから 5 項目を改訂版デートバイオレンス・ハラスメント尺度の項目として、選択した。身体的暴力尺度は、旧版では直接的暴力尺度という名称であったが、名称を変更した。ただし、「つきまとい・ストーキング」下位因子については、「別れようすると自傷行為をして脅されたことがある」、「別れるなら死んでやるといわれたことがある」の 2 項目は因子負荷量が高かったが、「通勤、通学路で待ち伏せされたことがある」や「見張っているぞと言われたことがある」などの項目と概念的に異なっていると考えられるため、その項目は除外した。その結果、7 個の下位因子にそれぞれ 5 項目ずつの 35 個の質問項目が選択された。これらの 35 個の項目に対して確証的因子分析を行った。その結果、良好な適合度が得られた（ $\chi^2(539)=970.15, p<.001$; CFI=.949; RMSEA=.037; SRMR=.040）。この尺度を改訂版デートバイオレンス・ハラスメント尺度として今後の分析に使用することにした。構成された尺度の項目を Table 1 に、各質問項目の男女別平均得点を Table 2 に、因子間相関を Table 3 に、各因子ごとの記述統計量を Table 4 に示した。歪度をみてわかるように、すべての下位尺度に於いて、分布は合計点が最低点である 5 点に偏った形状になった。

なお、越智ら（2014）で作成した改訂前の尺度との相関は、身体的暴力（旧版では、直接的暴力尺度という名称： $r=.995$ ）、間接的暴力（ $r=.992$ ）、支配・監視（ $r=.964$ ）、言語的暴力（ $r=.984$ ）、経

済的暴力 ($r=.947$), つきまとい・ストーキング ($r=.975$) の全ての尺度得点で高い相関を示した。

Table 1 デートバイオレンス・ハラスメント尺度の確証的因子分析結果

項 目	負荷量
身体的暴力 ($\alpha=.958$)	
相手に顔面を拳でなぐられたことがある。	.934
相手に髪の毛を引っ張られたことがある。	.901
相手に身体を拳で殴られたことがある。	.894
相手に身体を足で蹴られたことがある。	.905
相手に顔面を平手で打たれたことがある。	.904
間接的暴力 ($\alpha=.935$)	
殴るそぶりや、ものを投げつける振りをして脅されたことがある。	.854
大声で怒鳴りつけられたり、叫ばれたり、罵られたことがある。	.841
相手にものを投げつけられたことがある。	.898
机や壁を殴る、蹴るなどして相手から脅かされたことがある。	.907
意に沿わないからと言ってにらまれたことがある。	.814
支配・管理 ($\alpha=.929$)	
相手へのメールの返信や電話が少し遅れて腹を立てられたことがある。	.872
頻繁に電話やメールをされて、自分が誰に会っているや自分の行動を確認されたことがある。	.833
俺（私）とあいつ（人、もの、ことがらなど）のどちらが大切なんだという言い方をされたことがある。	.842
少し連絡が取れないだけで浮気を疑われたことがある。	.854
相手への LINE の返事が遅かったり、既読などに返事を送らなかったとして腹を立てられたことがある。	.854
言語的暴力 ($\alpha=.891$)	
相手に見下されるような言い方をされたことがある。	.808
相手に人前で恥をかかされたり、馬鹿にされたことがある。	.855
「ブサイク」などとわざと自分が嫌がる呼び方でよばれたことがある。	.742
自分と他の異性や以前の交際相手を比較されたことがある。	.771
相手の趣味に合わない髪型や服装だと文句を言われたりしたことがある。	.776
性的暴力 ($\alpha=.911$)	
いやがっているのに性的な接触をしてくることがある。	.811
いやがっているのに性的な話題をすることがある。	.846
裸や見られたくない写真を撮ろうとすることがある。	.845
いやがっているのにアダルトビデオやグラビアを見せられることがある。	.857
強引に体を触られることがある。	.743
経済的暴力 ($\alpha=.914$)	
貸したお金やものを返されなかったことがある。	.800
お金やものを貢がされたことがある。	.878
デートの時などにお金を払わされることが多い。	.675
お金をせびられたことがある。	.922
「好きならばこれを買って」とか「つきあいたいならこれをちょうだい」などと言われることがある。	.892
つきまとい・ストーキング ($\alpha=.947$)	
相手に実家やアパートに押しかけられたことがある。	.852
別れようとするとうるようなことを言って脅されたことがある。	.846
嫌がっているのに、どこにいくのにも相手についてこられたことがある。	.889
通勤、通学路などで待ち伏せされたことがある。	.919
見張っているぞなどといわれたことがある。	.930

Table 2 デートバイオレンス・ハラスメント尺度の項目別・男女別平均得点

項 目	被害者	
	男性	女性
身体的暴力		
相手に顔面を拳でなぐられたことがある。	1.43	1.18
相手に髪の毛を引っ張られたことがある。	1.39	1.24
相手に身体を拳で殴られたことがある。	1.46	1.21
相手に身体を足で蹴られたことがある。	1.48	1.26
相手に顔面を平手で打たれたことがある。	1.48	1.20
間接的暴力		
殴るそぶりや、ものを投げつける振りをして脅されたことがある。	1.47	1.30
大声で怒鳴りつけられたり、叫ばれたり、罵られたことがある。	1.61	1.40
相手にものを投げつけられたことがある。	1.52	1.27
机や壁を殴る、蹴るなどして相手から脅かされたことがある。	1.47	1.30
意に沿わないからと言ってにらまれたことがある。	1.74	1.38
支配・管理		
相手へのメールの返信や電話が少し遅れて腹を立てられたことがある。	1.71	1.44
頻繁に電話やメールをされて、自分が誰に会っているや自分の行動を確認されたことがある。	1.64	1.44
俺（私）とあいつ（人、もの、ことがらなど）のどちらが大切なんだという言い方をされたことがある。	1.68	1.39
少し連絡が取れないだけで浮気を疑われたことがある。	1.67	1.43
相手への LINE の返事が遅かったり、既読などに返事を送らなかったとして腹を立てられたことがある。	1.68	1.37
言語的暴力		
相手に見下されるような言い方をされたことがある。	1.65	1.53
相手に人前で恥をかかされたり、馬鹿にされたことがある。	1.52	1.29
「ブサイク」などとわざと自分が嫌がる呼び方でよばれたことがある。	1.50	1.40
自分と他の異性や以前の交際相手を比較されたことがある。	1.58	1.45
相手の趣味に合わない髪型や服装だと文句を言われたりしたことがある。	1.64	1.50
性的暴力		
いやがっているのに性的な接触をしてくることがある。	1.48	1.61
いやがっているのに性的な話題をすることがある。	1.44	1.42
裸や見られたくない写真を撮ろうとすることがある。	1.44	1.41
いやがっているのにアダルトビデオやグラビアを見せられることがある。	1.40	1.22
強引に体を触られることがある。	1.58	1.64
経済的暴力		
貸したお金やものを返されなかったことがある。	1.43	1.32
お金やものを貢がされたことがある。	1.45	1.21
デートの時などにお金を払わされることが多い。	1.61	1.48
お金をせびられたことがある。	1.38	1.20
「好きならばこれを買って」とか「つきあいたいならこれをちょうだい」などと言われることがある。	1.40	1.17
つきまとい・ストーキング		
相手に実家やアパートに押しかけられたことがある。	1.40	1.22
別れようとするとうるようなことを言って脅されたことがある。	1.44	1.17
嫌がっているのに、どこにいくのにも相手についてこられたことがある。	1.37	1.15
通勤、通学路などで待ち伏せされたことがある。	1.40	1.14
見張っているぞなどといわれたことがある。	1.35	1.11

Table 3 デートバイオレンス・ハラスメント尺度の尺度間相関行列

	身体的暴力	間接的暴力	支配・監視	言語的暴力	性的暴力	経済的暴力	つきまとい
身体的暴力	—						
間接的暴力	.865	—					
支配・監視	.705	.749	—				
言語的暴力	.712	.785	.752	—			
性的暴力	.711	.662	.698	.802	—		
経済的暴力	.742	.696	.653	.746	.805	—	
つきまとい	.780	.724	.725	.728	.785	.874	—

Table 4 バイオレンス・ハラスメント尺度の記述統計量

	平均	標準誤差	標準偏差	歪度
身体的暴力	6.66	.154	3.78	2.50
間接的暴力	7.23	.169	4.13	2.07
支配監視	7.73	.171	4.19	1.80
言語的暴力	7.54	.157	3.84	1.84
性的暴力	7.32	.159	3.90	1.99
経済的暴力	6.62	.144	3.52	2.57
つきまとい	6.38	.136	3.33	2.86
合 計	49.48	.933	22.86	2.34

3-2. デートバイオレンス・ハラスメント被害（自分）の性差

7つのデートバイオレンス・ハラスメント下位尺度ごとに男性（i.e., 加害者は女性）と女性（i.e., 加害者は男性）の平均得点を算出した。結果をTable 5に示した。 t 検定の結果、性的暴力以外のすべての項目で性差が有意となり、男性のほうが女性よりも多くのバイオレンス・ハラスメント

Table 5 バイオレンス・ハラスメント被害の性差（性別は被害者の性別）

	男 性	女 性	性差
身体的暴力	7.22 (4.42)	6.10 (2.90)	**
間接的暴力	7.82 (4.55)	6.65 (3.57)	**
支配監視	8.38 (4.54)	7.08 (3.71)	**
言語的暴力	7.91 (4.09)	7.18 (3.54)	**
性的暴力	7.33 (4.02)	7.30 (3.78)	<i>n.s.</i>
経済的暴力	7.27 (3.89)	6.37 (3.04)	**
つきまとい	6.97 (3.91)	5.79 (2.49)	**
合 計	52.9 (26.27)	46.5 (18.22)	**

()内は標準偏差；** $p < .01$

行為を受けているという結果が得られた。

3-3. デートバイオレンス・ハラスメント被害の年代差

7つのデートバイオレンス・ハラスメント下位尺度ごとに被害者の年代（10代、20代、30代）ごとの平均得点を算出した。結果をTable 6に示した。一元配置の分散分析の結果、すべての項目で有意差は検出されなかった。また、それぞれの下位尺度ごとに性差×年代の分散分析も行ったが、これに関しても有意な交互作用は、検出されなかった。つまり、デートバイオレンス・ハラスメントに関しては、被害者の年齢による違い、性との交互作用は生じないという事がわかった。

次に、加害者の年代の違いについて分析を行った。7つのデートバイオレンス・ハラスメント下位尺度ごとに加害者の年代（10代、20代、30代、40代）ごとの平均得点を算出した。結果をTable 7に示した。数値的には10代から40代に

Table 6 被害者（自分）の年代別デートバイオレンス・ハラスメント得点

	10代	20代	30代
標本数	43	295	262
身体的暴力	7.26	6.53	6.70
間接的暴力	7.42	7.09	7.36
支配監視	7.93	7.47	7.98
言語的暴力	7.53	7.47	7.62
性的暴力	7.95	7.07	7.49
経済的暴力	7.09	6.65	6.97
つきまとい	6.86	6.21	6.49
合 計	52.05	48.51	50.61

Table 7 加害者（交際相手）の年代別デートバイオレンス・ハラスメント得点

	10代	20代	30代	40代
標本数	33	316	189	62
身体的暴力	7.55	6.97	6.38	5.47
間接的暴力	7.63	7.41	7.26	6.00
支配監視	8.70	7.93	7.49	6.92
言語的暴力	7.79	7.59	7.56	7.08
性的暴力	8.18	7.31	7.35	6.79
経済的暴力	7.06	7.01	6.72	6.03
つきまとい	7.24	6.64	6.06	5.54
合 計	54.15	50.87	48.82	43.84

なるにしたがって、すべてのバイオレンス・ハラスメント得点は減少したが、一元配置の分散分析を行ったところ、身体的暴力、つきまといに関して年代の主効果（ $F(3, 596)=3.79, p<.01$; $F(3, 596)=3.29, p<.05$ ）のみにしか有意な効果が示されず、合計点に関しても、有意傾向にとどまった（ $F(3, 596)=2.17, p=.091$ ）。身体的暴力とつきまといについてのそれぞれの多重比較の結果、身体的暴力に関しては、10代と40代の間にのみ有意差が見られ、10代の身体的暴力の得点が40代よりも多かった。また、つきまといに関しては、群間に有意な差は見られなかった。合計点に関しても10%水準でしか有意な差はみられなかった（ $F(3, 596)=2.165, p=.091$ ）。

これらの結果を総合してみると、デートバイオレンス・ハラスメント行為に関しては、加害者が10代の場合、身体的暴力が幾分多い傾向にあるものの、それ以外はほとんど差は生じないということがいえるであろう。

3-4. デートバイオレンス・ハラスメント被害と学歴の関係

被害者の学歴を「高卒以下」、「短大・専門学校卒以下」、「大卒以上」の3つのカテゴリーに分け、7つのデートバイオレンス・ハラスメント尺度ごとに平均値を算出した。この結果をTable 8に示す。一元配置の分散分析を行ったところ、すべての下位尺度で有意な差は見られなかった。

Table 8 被害者（自分）の学歴カテゴリーごとのバイオレンス・ハラスメント総得点

	高卒以下	短大・専門	大卒以上
標本数	129	102	357
合 計	52.25	49.21	48.92

Table 9 加害者（交際相手）の学歴カテゴリーごとのバイオレンス・ハラスメント尺度得点

	高卒以下	短大・専門	大卒以上
標本数	140	106	342
身体的暴力	7.28	6.25	6.46
間接的暴力	8.06	7.33	6.85
支配監視	8.54	8.05	7.30
言語的暴力	8.39	8.04	7.01
性的暴力	7.99	7.50	6.94
経済的暴力	7.42	6.77	6.56
つきまとい	6.94	6.29	6.13
合 計	54.61	50.23	47.25

次に、加害者の学歴を同様なカテゴリーに分けて平均値を算出した。結果をTable 9に示す。この結果を分散分析したところ、身体的暴力（ $F(2, 585)=3.06, p<.05$ ）、間接的暴力（ $F(2, 585)=4.37, p<.05$ ）、支配監視（ $F(2, 585)=4.75, p<.01$ ）、言語的暴力（ $F(2, 585)=7.75, p<.01$ ）、性的暴力（ $F(2, 585)=3.85, p<.05$ ）、経済的暴力（ $F(2, 585)=3.05, p<.05$ ）、つきまとい（ $F(2, 585)=2.98, p<.05$ ）となり、すべての下位尺度で5%水準の危険率以上の有意差がみられた。また、合計点に関しても、1%水準で有意差が見られた（ $F(2, 585)=5.35, p<.01$ ）。それぞれの学歴カテゴリーごとに多重比較を行った結果、身体的暴力に関しては、5%水準で群間の差が検出されなかったが、ほかの条件においては、「高卒以下」と「大卒以上」の間で有意な差があった。

数値的には、身体的暴力以外すべての下位尺度で、「高卒以下」<「短大・専門学校卒以下」<「大卒以上」という傾向が見られ、加害者の学歴が高くなるに従って、バイオレンス・ハラスメント得点が少なくなるという傾向が見られた。なお、すべてのバイオレンス・ハラスメント得点について、学歴×性別の交互作用に、有意な差は見られ

なかった。

3-5. デートバイオレンス・ハラスメント被害 と飲酒・喫煙の関連

越智ら（2014）の研究においては、デートバイオレンス・ハラスメントの頻度と加害者および被害者の飲酒、喫煙傾向との間に関連が認められた。そのため、本研究においても、これらの関連について検討してみることにした。質問紙では、自分と交際相手について、それぞれ、飲酒・喫煙の状況を「非常に多い（1）」から「しない（7）」まで7段階で評定させた。飲酒については、「しない」ものは自分、相手ともに20%程度であり、7段階評定の平均値は4.5（「普通（4）」～「どちらかといえば少ない（5）」）程度であった。喫煙については自分、相手ともに全体の2/3のものが「しない」であり、平均は、5.7（「どちらかといえば少ない（5）」～「少ない（6）」）程度であった。各バイオレンス・ハラスメントの被害得点に差があるかを分散分析したところ、自分の飲酒の程度については、身体的暴力（ $F(6, 593)=4.13, p<.01$ ）、間接的暴力（ $F(6, 593)=5.77, p<.01$ ）、支配・監視（ $F(6, 593)=2.58, p<.05$ ）、言語的暴力（ $F(6, 593)=2.22, p<.05$ ）、性的暴力（ $F(6, 593)=2.77, p<.05$ ）、経済的暴力（ $F(6, 593)=2.33, p<.05$ ）、つきまとい（ $F(6, 593)=3.53, p<.01$ ）となり、すべての下位尺度で5%水準の危険率以上の有意差がみられた。多重比較の結果、自分の飲酒量が「非常に多い」場合に突出して各種のバイオレンス・ハラスメントの被害に遭いやすいことがわかった。一般に飲酒量が多くなればなるほど被害の危険は大きくなるような傾向が見られたが、飲酒「しない」ものに関しては、逆に得点が高い傾向にあった。

また、相手の飲酒の程度については、身体的暴力（ $F(6, 593)=3.08, p<.01$ ）、間接的暴力（ $F(6, 593)=4.34, p<.01$ ）、支配・監視（ $F(6, 593)=1.93, p<.10$ ）、言語的暴力（ $F(6, 593)=3.25, p<.01$ ）、性的暴力（ $F(6, 593)=2.54, p<.05$ ）、経済的暴力（ $F(6, 593)=2.32, p<.05$ ）、つきまとい

Table 10 被害者・加害者の飲酒量とバイオレンス・ハラスメント尺度の合計点

	被害者の飲酒量 （自分）	加害者の飲酒量 （交際相手）
非常に多い	62.5（40）	65.3（30）
多い	55.7（69）	50.0（62）
どちらかといえば多い	48.7（71）	50.2（58）
普通	47.6（110）	48.1（161）
どちらかといえば少ない	45.2（78）	45.2（66）
少ない	46.6（112）	46.6（111）
しない	50.2（120）	53.1（112）

（ ）内は人数

（ $F(6, 593)=3.77, p<.01$ ）となり、支配・監視については10%水準でそれ以外の尺度で5%水準の危険率以上の有意差がみられた。多重比較の結果、相手の飲酒量が「非常に多い」場合に突出して各種のバイオレンス・ハラスメントの加害が大きくなることがわかった。やはり、一般に飲酒量が大きくなるほど加害傾向は大きくなるような傾向は見られたが、飲酒「しない」場合には、逆に得点が高い傾向にあった。Table 10 にすべてのハラスメント下位尺度の合計得点と自分および相手の飲酒量の関係について示す。

喫煙量についても、喫煙量によって、各バイオレンス・ハラスメント得点に差があるかを分散分析したところ、自分の喫煙の程度、相手の喫煙の程度ともにすべてのバイオレンス・ハラスメント行為で、主効果が5%水準で有意になった。次に多重比較を行ったところ、飲酒と同様に、自分の喫煙、相手の喫煙ともに喫煙量が「非常に多い」場合に、すべての種類のバイオレンス・ハラスメント得点が突出して高くなる傾向にあったが、飲酒と比べて、条件ごとのサンプル数が少なくなってしまったため、安定した結果は得られなかった。

3-6 デートバイオレンス・ハラスメント被害 と恋愛の進展状況の関連

次に、恋愛の進展状況とデートバイオレンス・ハラスメントの関連について分析を行った。恋愛

Table 11 恋愛進展度合いに関する尺度の構成項目と男女別出現頻度

行 動	男 性	女 性	合 計	性 差
ふたりきりでデートをする	.886	.950	.918	*
ふたりきりで日帰りの旅行に行く	.547	.573	.560	<i>n.s.</i>
ふたりきりでお酒を飲みに行く	.503	.573	.538	<i>n.s.</i>
ふたりきりで泊まりがけの旅行に行く	.426	.543	.485	**
友人に恋人として紹介する	.367	.487	.426	**
相手の家（部屋に）に泊まる	.357	.480	.418	**
結婚について話題にする	.303	.470	.386	**
家族に恋人として紹介する	.283	.407	.345	**
自分の家（部屋に）相手を泊める	.350	.317	.333	<i>n.s.</i>
結婚について真剣に考える	.230	.310	.270	*
だいたいいつも一緒にいる	.180	.283	.232	**
婚約している	.073	.127	.100	*

(** $p < .01$; * $p < .05$)

の進展状況の指標としては、松井（1993）によるものなどがあるが、本研究ではあらためて、尺度を構成することにした。

「二人きりでデートをする」から「婚約している」まで恋愛進展過程で生じるイベント 12 項目について、それらのうち、いくつを体験しているかを、便宜上、「恋愛の進行状況」と考えた（ちなみに 10 代の調査対象者のすべてが、「ふたりきりでお酒を飲みに行く」には「いいえ」と回答していた、これは交際相手が 20 代以上の場合も含めてのことである）。7 種類のデートバイオレンス・ハラスメント行為尺度の得点を、恋愛の進行状況が異なることによって差があるかを分散分析したところ、すべてのデートバイオレンス・ハラスメント尺度の合計点 ($F(11, 588) = 2.42, p < .01$)、身体的暴力 ($F(11, 588) = 2.75, p < .01$)、性的暴力 ($F(11, 588) = 2.19, p < .05$)、経済的暴力 ($F(11, 588) = 2.91, p < .01$)、つきまとい・ストーキング ($F(11, 588) = 3.76, p < .01$) が有意となり、いずれも関係の進展に伴ってバイオレンス・ハラスメント行為が減少していくことが示された。間接的暴力 ($F(11, 588) = 1.30, p = .222$)、支配・監視 ($F(11, 588) = 0.91, p = .538$)、言語的暴力 ($F(11, 588) = 1.56, p = .108$) はそれぞれ 5% 水準での有意差は見られなかった。

これより、恋愛進行に伴って、身体的、性的、

経済的、つきまといに関しては減少していくか、あるいはこれらのバイオレンス・ハラスメント行為が見られた場合に関係進展が阻害される可能性が大きい、間接的暴力、支配監視、言語的暴力に関しては、恋愛進行に伴ってこれらの行為が減少しない、あるいはこれらの行為が関係進展の抑制因になっていない可能性を示しているといつて良いかも知れない。ただし、これら 3 つのものに関しても、数値的には関係進展に伴って尺度の得点は減少する傾向にあり、慎重に研究を進めていく必要がある。

3-7. デートバイオレンス・ハラスメント被害と愛情・尊敬・友情感情との関連

相手に対する愛情・尊敬・友情感情とデートバイオレンス・ハラスメント行為の関連についての分析を行った。はじめに相手に対するこれらの感情を測定する尺度を構成することにした。従来、愛情 (love) と好意 (liking) を測定するための尺度としては、ルービンの愛情-好意尺度が用いられることが多い。しかし、この尺度で測定している「好意」の中には、日本語の語感としてはむしろ、「尊敬」や「敬意」と考えられるものが多い。一方で「友情」といえるような共同活動（一緒に食事、デートなど）に関する項目は多くなかった。そこで、本研究では、ルービンの愛情・好意

Table 12 愛情・尊敬・友情尺度の因子分析結果（パターン行列）

項 目	因 子		
	1	2	3
尊敬尺度			
〇〇さんはみんなから尊敬されような人物だと思う	.835	.033	.001
〇〇さんは賞賛的になりやすい人物だと思う	.833	.115	-.147
クラスやグループで選挙があれば、私は〇〇さんに選挙は投票するつもりだ	.818	.135	-.223
私は〇〇さんのような人になりたい	.776	.158	-.169
〇〇さんの判断には全面的信頼を置いている	.767	.030	.089
私は〇〇さんをとても良く出来た人だと思う	.724	-.115	.259
〇〇さんは責任ある仕事に推薦できる人物だと思う	.700	-.161	.289
〇〇さんはとても知的な人だと思う	.692	.012	.107
〇〇さんはとても適応力のある人だと思う	.675	-.187	.271
愛情尺度			
〇〇さんと一緒にいられなければ、私はひどく寂しくなる	-.030	.799	.057
私は一人にいるといつも〇〇さんに会いたくなる	-.014	.796	.051
〇〇さんのことならどんなことでも許せる	.217	.702	-.359
〇〇さんを独り占めしたいと思う	-.106	.686	.159
〇〇さんが幸せになるのが私の最大の関心事である	.042	.679	.147
〇〇さんと一緒にいると相手の顔を見つめていることが多い	.123	.629	.014
〇〇さんなしに過ごすことはつらいことだ	-.096	.629	.179
私は〇〇さんを幸せにすることに責任を感じている	.065	.588	-.074
〇〇さんのためならどんなことでもしてあげるつもりだ	.003	.583	.306
友情尺度			
〇〇さんと一緒に話しをするのは楽しい	.018	-.050	.935
〇〇さんと遊びに行くのは楽しい	.033	-.054	.928
〇〇さんと一緒にいると落ち着く	.042	-.016	.886
もし〇〇さんが元気がなさそうだったら、私は真っ先に励ましてあげたい	-.102	.257	.703
〇〇さんに信頼されるととてもうれしく思う	-.040	.263	.651
削除した項目			
〇〇さんと私はとてもよい友人だと思う	.156	-.025	.370
困ったことは〇〇さんに相談したい	.427	.094	.343

因子抽出法：重みなし最小二乗法
回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

尺度に独自項目を加えた 25 項目の尺度を実施し、因子分析して、ルービンの「愛情」、「好意」尺度にはほぼ対応する「愛情」、「尊敬」尺度を作成、それに加えて、「友情」尺度を作成することにした。尺度の結果について、重み付けのない最小二乗法で因子分析し、プロマックス回転をおこなった。パターン行列を Table 12 に、因子間相関を Table 13 にあげる。「困ったことは〇〇さんに相談したい」という項目は、尊敬と友情の両方に負荷したため尺度からは削除し、「〇〇さんとはい

Table 13 愛情、尊敬、友情各尺度の因子間相関係数

	愛 情	尊 敬	友 情
愛 情		.487	.534
尊 敬			.542

数字はピアソンの相関係数

い友人である」という項目は、友情尺度と最も負荷したものの、全体的に負荷量が少なかったため削除し、最終的には合計 23 項目（愛情 9 項目、尊敬 9 項目、友情 5 項目）からなる尺度を構成した。それぞれの下位尺度の平均値を Table 14 に

Table 14 愛情, 尊敬, 友情各尺度の平均点と標準偏差

	男 性	女 性
愛 情	39.72 (9.69)	37.58 (10.29)
尊 敬	39.85 (9.89)	40.36 (10.17)
友 情	26.40 (6.13)	27.02 (6.28)

()内は標準偏差

Table 15 デートバイオレンス・ハラスメント被害と愛情, 尊敬, 友情尺度の相関

	愛 情	尊 敬	友 情
身体的暴力	-.011	-.002	-.251**
間接的暴力	-.019	-.026	-.206**
支配監視	.016	.025	-.169**
言語的暴力	.020	-.023	-.163**
性的暴力	-.063	-.052	-.214**
経済的暴力	-.054	-.064	-.238**
つきまとい	-.040	-.020	-.264**

相関に関する無相関検定 ** $p < .01$

あげる。 α 係数は愛情尺度 $\alpha = 0.905$, 尊敬尺度 $\alpha = 0.935$, 友情尺度 $\alpha = 0.933$ となった。

これらの尺度の得点と各種のデートバイオレンス・ハラスメント行為の尺度との相関を Table 15 にあげた。「友情」尺度がデートバイオレンス・ハラスメント尺度と一貫して負の相関を示しており, これらの行為が行われることが恋愛関係における友情成分に大きなマイナスの効果をもたすことが明らかになった。一方で, 「愛情」尺度, 「尊敬」尺度に関しては驚くべき事に, デートバイオレンス・ハラスメント尺度と全く関係を持っていなかった。これはデートバイオレンス・ハラスメント行為の頻度が愛情を低下させない, あるいは愛情の上昇がデートバイオレンス・ハラスメントを減少させないという可能性を示している。

3-8. デートバイオレンス・ハラスメント被害と交際の満足度との関連

デートバイオレンスやハラスメント行為は, 一般に交際の満足度を低下させるものになると思われる (Berkowitz & Frodi, 1979)。そこで, 7 段階の「自分から見た交際満足度」の評定値ごとにデートバイオレンス・ハラスメント得点に差があ

るかどうかを分散分析した。その結果, ある意味で当然ではあるが, 身体的暴力 ($F(6, 593) = 4.23, p < .01$), 間接的暴力 ($F(6, 593) = 2.75, p < .05$), 支配・監視 ($F(6, 593) = 2.57, p < .05$), 言語的暴力 ($F(6, 593) = 5.11, p < .01$), 性的暴力 ($F(6, 593) = 4.77, p < .01$), 経済的暴力 ($F(6, 593) = 5.78, p < .01$), つきまとい ($F(6, 593) = 4.84, p < .01$), 合計点 ($F(6, 593) = 5.06, p < .01$) のすべての尺度で有意な差が検出された。もちろん, 満足度が高いほど, それぞれのデートバイオレンス・ハラスメントの得点は低くなる傾向にあった。

また, 「相手からみた交際の満足度」の推定値ごとに同様にデートバイオレンス・ハラスメント得点に差があるのかどうかを分析したが, これも同様に, 身体的暴力 ($F(6, 593) = 6.47, p < .01$), 間接的暴力 ($F(6, 593) = 5.31, p < .01$), 支配・監視 ($F(6, 593) = 2.81, p < .05$), 言語的暴力 ($F(6, 593) = 6.17, p < .01$), 性的暴力 ($F(6, 593) = 5.48, p < .01$), 経済的暴力 ($F(6, 593) = 6.12, p < .01$), つきまとい ($F(6, 593) = 6.51, p < .01$), 合計点 ($F(6, 593) = 6.81, p < .01$) のすべての尺度で有意な差が検出され, やはり, 満足度が高いほど, それぞれのデートバイオレンス・ハラスメントの得点は低くなる傾向にあった。

3-9. デートバイオレンス・ハラスメントの被害と次の交際相手の見つけやすさ推定値の関連

今交際中の相手と別れるかどうかの判断においては, 「次の交際相手」を見つけることの困難性とその要因のひとつになっていることが指摘されている。デートバイオレンス・ハラスメントが存在するにもかかわらず, 「別れない」カップルが存在するのもしかししたら, この要因が関連しているのかも知れない。つまり, 若干のバイオレンスやハラスメントを受忍するほうが, 交際相手がない孤独感よりもまだましということである。もし, このような関係があるのならば, 次の交際相手が容易に見つかると考えている場合には, デートバイオレンス・ハラスメント行為を行うパート

ナーとは早期に別れることが出来ることになる。これは、「次の交際相手」が見つかりにくいと考えているほど、デートバイオレンス・ハラスメント状況から「離脱しにくい」ため、これらの被害をより受けているという事を予測させる。

そこで、このような関連が見られるかどうか検討してみることにした。7段階で評定させた「次の交際相手のみつけやすさ」ごとに、それぞれのデートバイオレンス・ハラスメント尺度の得点を分散分析したところ、身体的暴力 ($F(6, 593)=5.31, p<.01$)、間接的暴力 ($F(6, 593)=4.20, p<.01$)、支配・監視 ($F(6, 593)=4.14, p<.01$)、言語的暴力 ($F(6, 593)=5.21, p<.01$)、性的暴力 ($F(6, 593)=3.28, p<.01$)、経済的暴力 ($F(6, 593)=4.93, p<.01$)、つきまとい ($F(6, 593)=5.23, p<.01$)、合計点 ($F(6, 593)=5.77, p<.01$) のすべての尺度で有意となった。ただし、これは予想された方向とは完全に逆の傾向であり、「新しい交際相手を得ることが」たやすいと思っているほど、デートバイオレンス・ハラスメントを受けているという事が示された。さらに、その傾向は、たやすいと思っているほど、デートバイオレンス・ハラスメントが大きいというほぼ線形の傾向にあった。次にこの関係に性差があるのかを確認するためにすべての尺度について、性差を含めた二元配置の分散分析を行ったが、性差との交互作用は示されなかった。次の交際相手を見つけるまでの推定期間と性別ごとの結果を Table 16 に示した。

Table 16 被害者（自分）の次の交際相手のみつけやすさ評定値とバイオレンス・ハラスメント尺度合計点の関連

	男 性	女 性
数日以内	73.61 (13)	51.33 (12)
1 ヶ月以内	62.24 (21)	55.44 (16)
3 ヶ月以内	62.79 (38)	53.10 (30)
半年以内	50.43 (41)	47.13 (44)
1 年以内	48.05 (60)	43.37 (61)
2 年以内	49.56 (25)	42.07 (26)
それ以上かかる	49.31 (102)	45.29 (111)

()内は人数

ちなみに、本研究では、「異性から見た自分の魅力度」についても7段階で推定させているが、この値と、次の交際相手のみつけやすさについては、それほど高くはないが有意な相関 ($r=-.249, p<.01$) が示され、自分の容姿に自信があるほど、次の交際相手もみつけやすいと判断していた。

3-10 デートバイオレンス・ハラスメントの被害とパートナー間の魅力の差の関連

外見的な魅力の低さと暴力被害の受けやすさの関連が指摘されることがある (Berkowitz & Frodi, 1979)。これは、デートバイオレンスにも当てはまるのだろうか。自分自身の魅力度評定とそれぞれのデートバイオレンス・ハラスメント尺度の得点について魅力度評定値ごとの一元配置の分散分析を行ってみたところ、すべての尺度について、魅力度の主効果が有意であった。多重比較の結果、自分の魅力度が「非常に魅力的 (7)」の場合のみ、バイオレンス・ハラスメント被害が突出して大きくなるという傾向があることが示されたが、この傾向は、自分自身の魅力度を「非常に魅力的である (7)」と回答している男性6名中の3名が、ほとんどのデートバイオレンス・ハラスメント項目に最高点で回答しており、この影響が大きいという事がわかった。そこで、この3名のデータを削除して、あらためて分散分析を行ったところ、魅力度の主効果が有意となるのは、支配・監視尺度のみとなった ($F(6, 590)=3.65, p<.01$)。多重比較の結果、自分の魅力度を「5」と評定した場合に、支配・監視が多い傾向が見られたが、全体的に魅力度とデートバイオレンス・ハラスメント傾向に一貫した傾向は見られなかった。

また、交際相手の魅力度評定値とデートバイオレンス・ハラスメント傾向についても、上記の3名のデータが同様に外れ値を示していたため、これを削除して分析を行ったところ、すべての尺度で有意な差は見られなくなった。以上のことから、自分と交際相手の双方を非常に魅力的だと考えていて、非常に激しい暴力を受けている男性が存在

する可能性は捨てきれないものの、自分や相手の魅力度はデートバイオレンス・ハラスメント行為とほとんど関連していないことが示された。

次に、自分の魅力度に対して相手の魅力度が低いとよりデートバイオレンス・ハラスメント行為が行われやすくなり、また逆に自分が相手よりも魅力度が低いとデートバイオレンス・ハラスメント行為を受けやすくなるかについて、つまり自分と相手の魅力度の差とデートバイオレンス・ハラスメント行為の関連についての分析を行った。外見的魅力の差は交際の持続にネガティブな相関があることが指摘されているからである (White, 1980)。自らの異性から見た魅力度とパートナーの異性から見た魅力度についての7段階での評定結果の差と各バイオレンス・ハラスメント尺度の得点について分散分析を行った。その結果、身体的暴力 ($F(10, 589) = 0.65, n.s.$)、間接的暴力 ($F(10, 589) = 0.758, n.s.$)、支配監視 ($F(10, 589) = 1.733, p = .08$)、言語的暴力 ($F(10, 589) = 1.032, n.s.$)、性的暴力 ($F(10, 589) = 1.041, n.s.$)、経済的暴力 ($F(10, 589) = 1.557, n.s.$)、つきまとい ($F(10, 589) = 1.101, n.s.$) と、すべての尺度で有意な差は認められなかった。これより、魅力度の差に関しても、デートバイオレンス・ハラスメント行為には関連していないという事が示された。

4. 総合考察

本研究は、デートバイオレンス・ハラスメントの程度を測定する比較的精度の高い心理尺度を作成し、それを用いて、7種類のバイオレンス、ハラスメントごとにその性差や学歴差、喫煙・飲酒歴、対人魅力との関連などについての基礎的なデー

タを報告した。その結果、本邦ではあまり報告されていなかった現象、例えば、男性のほうが女性よりも各種のバイオレンス・ハラスメントを受けていることや加害者の学歴がバイオレンス・ハラスメントと関連していること、恋愛の進展に伴ってバイオレンス・ハラスメント行為が減少することなどが示された。従来のこの種の調査は、「恋人から暴力を受けたことがありますか (はい、いいえ)」程度の大雑把なデータしか収集しておらず、分析も単純なクロス集計しかしていないケースが多かったので、本調査では、現在行われているデートバイオレンス・ハラスメントについてある程度、精密なデータが得られたのではないかと考えている。

注

本研究は、科学研究費補助金 (基盤研究 C) の助成を受けて行われた。

参考文献

- Berkowitz, L. & Frodi, A. (1979). Reactions to a child's mistakes as affected by her/his looks and speech. *Social Psychology Quarterly*, 42, 420-425.
- 越智啓太, 長沼里美, 甲斐恵利奈. (2014). 大学生に対するデートバイオレンス・ハラスメント尺度の作成. 法政大学文学部紀要, 69, 63-74.
- 越智啓太, 喜入暁, 甲斐恵利奈, 長沼里美. (2015). 女性蔑視的態度がデートハラスメントに及ぼす効果. 法政大学文学部紀要, 70, 101-110.
- 松井豊. (1993). 恋愛行動の段階と恋愛意識. 心理学研究, 64 (5), 335-342.
- White, G.L. (1980). Physical attractiveness and courtship progress. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 660-668.